Ｎｏ．２９５【２０１８年２月２３日配信】
国後島・択捉島の土器　その２（担当：児玉）

こんにちは。文化財課の児玉です。先月に引き続き北方領土の博物館に展示されていた土器について紹介したいと思います。今回は択捉島です。

択捉島には、約 6,000 人のロシア人が居住しており、ここもインフラ整備や住宅建築等が急速に進んでいます。国後島もそうでしたが、島を走っている車のほとんどが日本の中古車でした。ビジネスホテルやリゾートホテルもあり、レストラン・商店も多く、国後島よりも発展している印象です。

国後島も同様でしたが行政府や文化ホール・スポーツセンターなどの複合公共施設が最近整備され、博物館もこの施設の中に併設されています。時間がなかったので、筆者の専門である考古のコーナーだけ見学。そこには「続縄文土器」が数点ほど展示されていました。

続縄文土器は、北海道地方を中心に縄文時代に後続する時代に使われた土器のことで、この博物館には「宇津内(うつない)II 式土器」と「後北(こうほく) C2・D 式土器」と呼ばれる二つの型式の土器が展示されていました。

「宇津内 II 式土器」は、続縄文時代の前半期に当たり、本州の弥生時代後半に相当します。北海道東北部の在地色の強い土器であり、青森県で出土したという話は聞いたことはありません。

もう一つの「後北 C2・D 式土器」は、続縄文時代の後半期に当たり、本州の弥生時代最終末から古墳時代に併行する三世紀前半のもので、北海道全域に分布し、北はサハリン南部、南は東北地方から越後平野に至る広い範囲で出土が確認されています。青森県内での出土例も多く、青森市内では玉清水（１）遺跡や宮田館遺跡などでも見つかっています。

このように、北海道の続縄文時代は、前半期は東北地方の弥生文化との関係が希薄で、地方色が豊かで強い時代、後半期は道央部の影響が波及して地域色が薄れ、斉一性の強い時代でありました。

こうした現象について、千島列島の択捉島も同様であることが、今回の博物館展示の土器で確認することができました。土器型式の判別は、土器の形や文様の差異だけではなく、断面の形や厚さ、文様をつける工具など、わずかな違いで見分けるマニアックな作業ですが、土器型式の地域的な広がりを把握することにより、これに基づく地域間交流の実態を探ることができるのです。

択捉島の後北(こうほく)C2・D 式土器